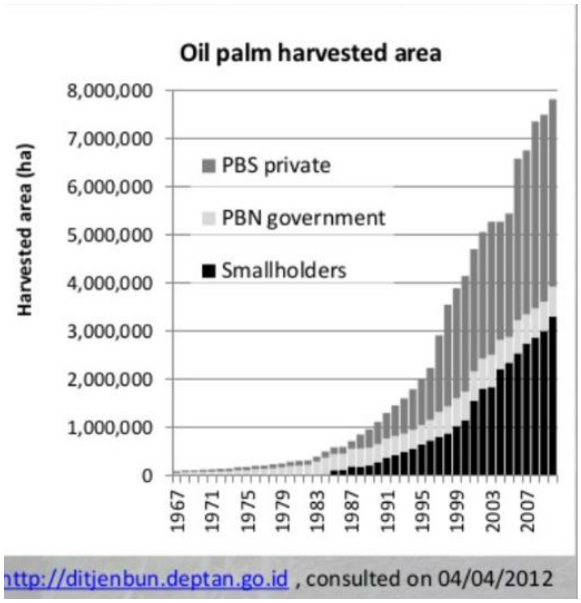
パーム油学習会第 6 弾報告「アブラヤシ栽培における小農の役割と課題」

12 月 10 日（土）に大阪梅田の聖パウロ教会で行われた今回の学習会では、近年増加が著しく無視できない存在となってきた小農によるアブラヤシ生産の状況について、大阪大学で教官をされていた神前進一さんと、元小学校教諭で「ウータン・森と生活を考える会」の古くからのメンバーである笠原英俊さんにお話をしていただきました。 最初に神前さんから、「小農（smallholder）」の定義など基本的なことと小農の増加の背景などを説明していただきました。「小農」とはどんな人たちをさすのか、さまざまな説明があるのですが、おおむね、小農とされる人たちに関する統計では、一農家あたりの栽培面積はほぼ 2 ヘクタールほどなので、だいたい 2 ヘクタールほどのアブラヤシ農園を所有している人というぐらいでイメージすればいいのではないかとのお話でした。



インドネシアの部門別アブラヤシ収穫面積の推移

（黒い部分が小農）

そして、この小農のアブラヤシ生産面積の割合は、インドネシアで 2010 年には 4 割まで増加し、マレーシアでもアブラヤシ栽培面積の 40％を占めており、増加傾向にあります。インドネシアではスマトラ島で多く（小農の栽培面積 300 万ヘクタールの 80％がスマトラで、カリマンタンは 15％）、とくにスマトラ島のリアウ州では 2005 年以降の増加が目立っています。

ただし、アブラヤシの果実は 24～48 時間以内に工場で蒸して圧搾してパーム油を抽出する必要があり、この工場の稼働には最低でも３０００ヘクタールの栽培面積が必要となるので、小農であっても、近くに大規模なプランテーションの工場がなければ、アブラヤシの栽培で利益をあげることはできません。小農のアブラヤシ栽培も、大規模プランテーションに依存した存在で、アブラヤシの収穫後すぐにプランテーションの工場に運ばなければなりません。

ハラパン村の周辺のジュルンブン区の個人農地に植えられたアブラヤシ

最近ではウータン・森と生活を考える会がかかわっているハラパン村の周辺でも、急速に小農のアブラヤシの植栽が進んでいます。また、ハラパン村に隣接するブダウンやクマイスブランのジャワ島からの入植者の村では、小農によるアブラヤシ生産がうまくいき、ハラパン村と比べても急速に豊かになり、その差は歴然としています。

クマイスブラン道路沿いの小農アブラヤシ栽培　（2016 年 8 月）

ただし、小農といっても大きく二つに分けられます。アブラヤシを搾油工場に持ち込むこと以外は、自分で独立してやる小農と、プランテーション企業と結びつきをもったプラスマとよばれる小農がいます。

もともと、アブラヤシ生産については、貧困解消のための小農育成という国の政策があり、また、マレーシアのサラワク 州では先住民が権利を持っている土地を政府機関に預けて、プランテーション企業と合弁して、利益を配分してもらうというタイプもあります。

自分でアブラヤシを生産するのではなく、企業などに土地を提供して、地代だけを受け取る人々、自分もアブラヤシ生産には携わるが、自分の土地ではなく、企業が管理している農園で働き、地代と給料を受け取る人々、自分の土地で働くが、企業などの強い統制を受けている人々、近くにプランテーションと搾油工場ができたので、自分でアブラヤシの生産をはじめた人などさまざまなタイプがあります。

マレーシアでの小農のアブラヤシ栽培では FELDA（Federal Land Development Authority）の存在が大きく、また、最近 FELDA 自身も大きく変わってきています。かつて、連邦土地開発庁として発足した FELDA は、2003 年には FELDA　Holding 社として公開会社化し、世界最大のパーム油生産会社となりました。現在では農園部門から精製・流通・油脂化学工業など国内外で川下部分まで垂直統合した巨大企業体となっています。1960 年にアブラヤシ栽培などの入植者を募集し、入植者をきびしくコントロールして、1990 年までに 119,300 世帯の入植を完了しましたが、1991 年からは募集を停止しました。小農を育成するということでは、成功したのですが、労働力は入植者だけでは足りず、インドネシア人の労働者を雇っており、その数は入植者数をこえています。

笠原さんは、同志社大学などで行われているアブラヤシ研究会に何度も参加され、プランテーションでは「弱くていじめられている農民」というイメージだった小農の状況が大きく変わっているのでないかと気づき、いろいろと調べられて、今回はアブラヤシ研究会のメンバーの報告などをもとにして、お話をしていただきました。国営のアブラヤシ農園企業などいくつかの農園の状況を報告していただきましたが、そこでは、従来の先住民などの農民は土地を手放して、アブラヤシで利益が上がることに気がついた農園の職員や教師・公務員・政治家など他の職業の人々、他の地域から来た人々が土地を買い入れて、人を雇うなどしてアブラヤシ生産に参加し、かなりの収益をあげている状況にあること（インドネシアの大学のベテランの先生の給料より多い）。ただし、以前はアブラヤシはあまりもうかるものではなかったのが、アジア通貨危機でインドネシアの通貨が下落したことにより、パーム油の値段が急騰したことで、利益が上がることようになり、アブラヤシの生産が急拡大し、小農がアブラヤシ生産に参加するようになったことなどが 4 ヵ所の地域についてお話ししてください

ました。

そして、神前さんが他の作物に比べて圧倒的に高収入が期待できるため小農のアブラヤシ栽培はどんどんふえているが、企業のプランテーション農園に比べ単収が半分～6 割程度と低いこと、アブラヤシの植え替えの時に 3 年ほど収入が途絶えてしまうので、それを乗り越えるのが難しいこと、アブラヤシ農園企業に土地を提供したものの、配当金がなかなか支払われずトラブルになっている事例もあること、大企業よりも小農の方が手軽に開発できてしまうために森林の破壊などをすすめてしまう、などの問題点を指摘されました。

質問や意見も活発に出され、インドネシアの経済を考えるときには「華僑」（中国系の人々）のことも考えなければならないのではないかとの意見も出されました。　　（米澤興治）

パーム油に発がん性？

神前進一

世界で最も多く消費されている食用油のパーム油は，生産過程で森林や泥炭地の破壊，温室効果ガスの排出，労働者の搾取や人権侵害などを引き起こすとして批判が高まりつつある。これに加えヨーロッパではパーム油の安全性を懸念した動きが生じている。

2016 年 5 月にヨーロッパ食品安全機関（EFSA）がパーム油の発がん性を公表したことに端を発する。パーム油は精製過程の最終段階でオレンジ色と独特の臭いを取り除くために 240～260℃で処理されるが，これによりグリシドール脂肪酸エステル（GE）という物質が生成され，これが発がん性を持つと結論付けられた。パーム油に含まれる GE は他の植物油に比べて段違いに多く，次に多く含まれるコーン油の 7.5 倍に達する。粉ミルクだけで育つ乳児は健康に影響を及ぼさないとされる量の 10 倍の GE を摂取するため最も危険性が高く，乳幼児と子どもは平均的な量の摂取も避けるべきで，成人では多量の摂取は健康上の懸念を生じさせると，摂取の制限が奨励された。

これをうけて欧米の朝食に欠かせない Nutella というチョコレート風味のスプレッドなどを製造するイタリアの菓子メーカーFerrero 社は，自社製品中のパーム油は GE を生じさせない 200℃以下で処理しているため安全とのキャンペーンを 9 月以来テレビコマーシャルや新聞紙上で大々的に展開している。イタリアでは EFSA の決定をうけて小売り最大手の Coop が「予防措置」として全ての自社ブランド製品からパーム油をボイコットし，最大の食品会社 Barilla 社もパーム油使用を中止し，「パーム油を含まず」と包装に表示している。

パーム油中の GE の存在は 2009 年にドイツの連邦リスク評価機関が初めて明らかにし，日本でも花王が食用油エコナの特保指定を取り下げるなどの動きがあった。しかし日本も米国もトランス脂肪酸の摂取を制限し，パーム油が代替油として消費が伸びている。パーム油には GE だけでなく，酸化防止剤の添加物 BHA，BHT の発がん性も危惧されている。健康には油を控える食生活への転換が必要と言えるだろう。

参考資料：Nutella maker fights back on palm oil after cancer risk study. *Reuter* 2017.1.11

Nutella manufacturer: Palm oil in product is ‘safe’, despite cancer concern. *Mongabay* 2017.1.15